

### 第3回「絵筆に込めた思い～アートで広がる表現の世界～」

施設の創作活動室に足を踏み入れると、色とりどりの絵の具の匂いと、集中して作品に向き合う利用者さんたちの真剣な表情が出迎えてくれます。その中でも、ひときわ集中して絵筆を動かしているのが、健一さん（仮名・28歳男性）でした。

健一さんは重度の知的障害があり、言葉でのコミュニケーションは限られていましたが、絵を描くことに対しては人一倍の情熱を持っていました。施設を利用し始めた当初は、他の活動にはなかなか参加できずにいましたが、アートセラピーの時間だけは目を輝かせて参加していました。

最初の頃、健一さんの絵は色を塗りつぶすだけのものでした。しかし、よく見ると、使う色彩には一定のパターンがあり、心の状態が色の選択に現れているように感じられました。担当の佐藤職員は、「健一さんなりの表現方法があるはず」と信じ、作品を丁寧に保管し、日々の変化を記録し続けました。

ある日、健一さんがいつもと違う描き方をしていることに気づきました。これまでの塗りつぶしではなく、筆の先で点々を描いているのです。最初は偶然かと思いましたが、数日続けて同じような手法で描いているのを見て、佐藤職員は「これは健一さんの新しい表現技法だ」と確信しました。

健一さんの作品は、点描画のような独特な手法で描かれた風景画へと発展していききました。青い点で空を、緑の点で木々を、黄色い点で太陽を表現する作品は、見る人の心を和ませる温かさに満ちていました。言葉では表現できない健一さんの内面世界が、絵筆を通じて美しく描き出されていたのです。

そんな健一さんに大きな転機が訪れました。施設では年に一度、地域の方々にも開放している文化祭を開催しており、今年は施設内に大きな壁画を制作することになったのです。「健一さんにもぜひ参加してもらいたい」と職員一同で相談し、健一さんに声をかけました。

健一さんは最初、大きなキャンバスを前に戸惑っているようでした。いつものスケッチブックとは違う大きさに、どう向き合えばよいのか分からない様子でした。佐藤職員は「健一さん、いつも通りで大丈夫ですよ。好きなように描いてください」と優しく声をかけました。

他の利用者さんたちも壁画制作に参加し、それぞれの得意分野を活かして協力しました。健一さんは空の部分を担当することになり、得意の点描技法で青空に浮かぶ雲を表現することにしました。

制作が始まると、健一さんの集中力は素晴らしいものでした。一点一点、丁寧に色を重ねていく姿に、他の参加者たちも感動していました。「健一さんの絵、とても

きれいね」「こんな描き方があるんだ」と、みんなが健一さんの技法に興味を示しました。

完成した壁画は、施設のエントランスホールに飾られました。文化祭当日、多くの地域の方々が壁画を見に来てくれました。「この空の部分、とても美しいですね」「点で描かれているんですか、素晴らしい技法ですね」という声が聞こえてくると、健一さんは恥ずかしそうにしながらも、とても嬉しそうな表情を見せました。

地域の小学生たちも見学に来て、「どうやって描くの？」と健一さんに質問しました。健一さんは言葉で説明することはできませんでしたが、実際に筆を持って点を描いて見せてくれました。子どもたちは「すごーい！」と目を輝かせ、健一さんも満足そうに微笑んでいました。

ご家族も壁画を見に来てくださり、お父さんは「まさか健一がこんなに立派な作品を作れるなんて」と涙を浮かべていました。お母さんも「家では見せない集中力ですね。本当に絵が好きなんですね」と感動されていました。

この体験を通じて、健一さんはより積極的に創作活動に取り組むようになりました。また、他の利用者さんたちとの交流も増え、絵を通じてコミュニケーションを取る場面が多く見られるようになりました。

健一さんの絵筆に込められた思いは、言葉を超えて多くの人の心に届きました。アートは、障害の有無に関わらず、誰もが持つ表現したい気持ちを形にできる素晴らしい手段だということを、健一さんが教えてくれました。今日も創作活動室では、健一さんが新しい作品に向き合っています。